

都々逸エレキ冊子

美しい人

唄が化けたる物語

斜め向こうの席に座った君は

最初に花天

が二物を結
与えた

例えはのたえ

は伸ばせない。
ただよもは伸ば

誰

だろ

立てばう。着物の座れば牡丹

歩く姿は百合の花



都々逸エレキ冊子 特別企画

唄が化けたる物語



はじめに

都々逸（どどいつ）は、江戸末期に初代の都々逸坊扇歌によって大成された口語による定型詩であり、七・七・七・七・五の音数律に従って詠まれる。

元来は、三味線と共に歌われる俗曲で、音曲師が寄席や座敷などで演じる出し物であった。主として男女の恋愛を題材として扱ったため情歌とも呼ばれる。

(Wikipedia より引用)

今回は都々逸ではなく、いつも都々逸に親しんでいる皆さんによる短編集です。古典都々逸をお題にSS（シヨート・シヨート）を書いていただきました。古典都々逸の定義については諸々ありますが、まあ簡単に「江戸／明治くらいの古いもの」としています。詠み人知らずのものが多く、中には民謡の節なども含まれています。

短編とはいえ物語になると味わいが変わるのがまた面白いところ。解釈が様々取れる都々逸の世界に少し具体性が増し、色がつきます。まるで森が紅葉に染まるように。

黄色に染まるか赤に染まるか、それは書き手の思い次第。様々な世界が繰り広げられるのは面白いものです。

お題となった都々逸も、有名なもの、そうでないもの、よりどりみどり取り揃えてございます。お気に入りを見つけていただければ幸いです。都々逸の粹と色と情を綴った物語、どうぞお楽しみ下さい。



安心して下さい、フサフサですよ

目次

- | | |
|-------------|--------|
| 恋に焦がれて | ルオ |
| ひざにもたれて | 萩原とてふ |
| 賽の河原と | 神保茂 |
| 船を沈めた | 中村成志 |
| ちらりちらりと | 東風 |
| 凍る硯に | 和純 |
| お酒飲む人 | 豆崎豆太 |
| つねりや紫 | せいや |
| たんと売れても | 下弦 |
| この雪によく来たものと | 猫亭屑屋 |
| 影も形も | 神保茂 |
| 星の数ほど | 小春まりか |
| 泣いた拍子に | トマトっぽい |

主によう似た
あの方恋しや
立てば芍薬
さんさ時雨か
忍び足して
惚れさせ上手な
あきらめましたよ
散切り頭を
不二の雪さえ
三千世界の
浮気うぐいす
よその夢見る
惚れて惚れられ
惚れて通えば
信州信濃の

豆崎豆太
和南羽里
日魚ときお
ヒロマル
和純
中森つん
中森つん
豆崎豆太
小早川
ルオ
ルオ
猫屋久太
琢
ねん
すいすい

思い出すよじゃ

表向きでは

逢うたその日の

人もほめるし

戀という字を

から傘の骨の数ほど

寝ぼけ烏に

ながい話を

どうせ互いの

聞いて恐ろし

花は散り際

泣いた拍子に

入れておくれよ

こうしてこうすりゃ

せいや

ボンゴレーノ麴

小春まりか

萩原とてふ

小早川

ひらたてる

神保茂

東風

悠佳里

中村成志

和純

下弦

小早川

中村成志

恋に焦がれて

ルオ

声がする。まっすぐに好意を示す言葉ばかりだ。周囲の誰もが目尻を下げて、憧憬と慈愛で結ばれた二人を眺めているのだろう。眉が寄るのは汗でシャツが張り付くせいだと己に言い聞かせ、障子に手をかけた。引き開けようとして、止まる。

窺うように刺す問いが投げられた。こちらの名を挙げ、どう思っていますか、と。「大切だよ」

だらしなく相好を崩した顔が想像出来る言い方でなければ、どれほど嬉しかったか。いや、そうでなければ、尚更痛みが増したただけだ。そこには友愛か、どうも虫屑目に見積もっても家族愛に類似するものしか含まれていない。

じり、と焦げ付く匂いがする。障子に落ちる濃い影はひとつだ。蝉が、五月蠅い。

恋に焦がれて鳴く蝉よりも鳴かぬ螢が身を焦がす

ひざにもたれて

萩原とてふ

——外は月。虫の鳴ける静けさに、二人の影。

「月と虫を着に酒を一つ。こんな風流もいいもんだなあ」と翁の言うも「この幾十年そんなこと一度も言ったことないじゃないでしょうに」と嬸の呆れたような顔である。

「あいつらが行つちまつたからな。こんな静かな夜つてのも久しぶりつてもんでさあ」

「子供が生まれるまではお前さんがうるさかったからねえ」

「うるさいやい」

翁は酔いが回ったのか、嬸の膝にもたれ目を閉じる次第であつた。

虫も鳴き疲れる頃。薄目の開ける翁の唄う。

「ひざにもたれて顔うちながめこんなおまへになぜほれた、つと」

「何言っているんですか。風邪ひきますよ」

嬸は何気ないままに翁を起こし、酌をし直したそうな。

ひざにもたれて顔うちながめこんなおまへになぜほれた

賽の河原と

神保茂

賽の河原に女が一人。

「恋しい、恋しい、恋しい」そう言って女は石を積む。積み重なった石は崩れ落ちる。落ちた石を拾って、女は再び石を積む。カチリ、カチリ、カチリ。手の皮が破れ、血が石を染める。それでも女は石を積む。石は碎けて小石となり、小石は碎けて砂となる。

朱殷に染まった砂の山。もうここには誰もいない。

だが、よく晴れた新月の晩、涙をこらえ、あてどもなく歩く者の耳には、今なお女の声が聞こえてくるのだという。

賽の河原とぬし待つ夜半は小石小石が山をなす

船を沈めた

中村成志

……なんで、貴方の部屋なんか、に
ここが一番近かったからだ

余計な

雨の中、座り込んだ顔見知りをおけとい
ただの、貧血です

なおさらだ。濡れ鼠で強がるな、莫迦が

訴えますよ

好きにしろ。自分で立って、帰れるよ
うになっただけならな
立て、ない

見たことか。ほれ、体を拭いて着替える
くらいは出来るだろう
……

俺は買い物に行く。ああ、鍵は郵便受
けに入れておけ

——や、る

なんだと？

居着いて、やる

船を沈めたそのつぐないは金を取らずに国を取る

ちらりちらりと

東風

決してお前まで届かないように、言葉を雪に吸わせるように、声は音にならないまま降り積もる。

。。***。

落下するのも当然だろ。ヒトのキモチってやつは無駄にクソ重い。おまけに取り扱い注意ときた。そんなものを受け取らされる身にもなってみろ。嫌だろうが。

。。***。

自分だって後悔してるよ。何でこんなことになったんだってな。だからって捨てられないんだから馬鹿らしい。深みに嵌って前にも後ろにも行けやしねえ。

。。***。

ああ嫌だ。本当に後悔してるんだ。このまま凍え死んでもいい。でも、お前に会った事だけは死んでも後悔したくないから救えないんだ。

。。***。***。***。***。

ちらりちらりと降る雪さえも積もり積もりて深くなる

凍る硯に

和純

「あなたに僕から手紙を送るのは初めてですね。

いつもは直接会っている馴染みの友人と、時には文で交流してみるのも一興かと思ひ筆を取りました。

しかし：少々退屈な内容ですみません。

手紙を女性に宛てることに慣れていなくて…。

いつの間にやらもう年末ですね。

街の様子も慌ただしくなってきました。

少し仕事が落ち着いたら、また会いに行きます。

今年中は難しいですが。

今度、皆で甘味屋さんに行きませんか？

六月に行ったあのお店に。

考えておいてくれると嬉しいです。

来年もよろしくお願いします。」

……ああ、ああ、私はどうすればいいのですか。お返事を綴る筆が震える理由は、寒さではないのです。私も、私だって、本当はずっと前から。

凍る硯に息吹きかけて
こぼす涙にしめる筆

お酒飲む人

豆崎豆太

親友の酒癖は悪い。話は長いわ泣き上戸だわ、飲ませればほとほとろくなことが無い。

「聞いてんのかよ」

「聞いてねえよ」

「聞けよ」

「何が悲しくてお前の彼女の愚痴という名の惚気なんか聞いてやらなきやならんのだ」

「だって俺の話に付き合ってくれるのお前だけだしさーあー」

親友はテーブルに突っ伏したままじたじたと肩を揺する。

「そんだけ酒癖悪きゃ当たり前だ」

つうか俺以外に見せんな、そんなだらしなない姿。言いかけた言葉を、ビールと一緒に喉の奥へ流し込んだ。

お酒飲む人
芯から可愛い
酔って管巻
きやなお可愛い

つねりや紫

せいや

腕にひとつ。腹にひとつ。手が届いて隠しやすい胸と腿には数知れず、鬱血の花弁が散っている。この想いを抱いてはいけない。こんな醜いものはあの人をしあわせにしない。情欲の蕾が膨らむたびに彼は痛みで自分を罰し、感情の花がひらく前に丁寧に殺していく。鍬を入れれば入れるほど草木は育ちやすくなる。少年がそれを知っていたとて、他に何ができたろうか。せんぱい。追い詰められた喉の奥を押し上げる言葉を殺す。咲く前に潰された花がまたひとつ、胸に散った。

つねりや紫喰いつきや紅よ 色で固めたこのからだ

たんと売れても

下弦

木戸の陰に座りこんでいたら、風車売りのあんちゃんに見つかった。

「やー坊。向こうで、お千代がしょげてたぜ」

あんちゃんの抱える弁慶には、大量の風車が刺さったまま、一向に減っている様子がない。

「知らねえ。あんな癩癩持ち」

「そんなにうなだれてちゃあ、説得力が無えなあ」

こつちをのぞきこむ顔が、からからと笑う。

「うるせえな。あんちゃんこそ、さっさと商いにもどれよ。ーっつっても、こんな風の無い日じゃ、風車だって働きたかねえだらうけど」

「そうだな。機嫌を直してもらうには、持って走らねえとなあ」

そう言うなり、あんちゃんが、おれの体をひよいと担ぎ上げた。風車が一齐に回り出す。

「おろせ。おろせよ。わああああああ

たんと売れても売れない日でも同じ機嫌の風車

この雪によく来たものと

猫亭屑屋

1月の半ば、雪の降る中、故郷の無人駅から最終電車が発ったあと、急に呼び出された僕は、少し暖かさの残る待合室で彼女と会った

「どうしたの？」

「ちよつと話がしたくて」

幼馴染だった彼女とは地元の別々の大学に進学して、

同じサークルで偶然に会い、なんとなく付き合っていたが、地元を離れた彼女と会うこともなく2年近くが過ぎていた

互いのどうでもいいような近況報告が続いた後、隣に座っていた彼女は急に身体を寄せて言った

「勤務先の人からプロポーズされた…どうしよう？」

雪は激しくなって、この2年の空白を埋めるように駅前の轍を消してゆく…
僕は口を開いた。

この雪によく来たものと互いに積もる 思いの深さを差してみる

影も形も

神保茂

九州にある大きな街で、過去百年ぶりといわれる大雪が降った。大雪に慣れていない地のこと、電車は早々に運休止、みるみるうちに道路も雪に覆われた。閉じ込められた人々は、暇を持て余して雪だるまを作り始めた。家の門に、庭に、マンションのベランダに。人の姿が消えた街は、雪だるままで賑わった。

翌朝は、打って変わって上天気。たちまち雪は解けだして、泥水となって流れていった。あれほどたくさん雪だるまを見る機会は、この街の人々にはもう来ないのだろう。

それから十月十日経ち、街で多くの赤ん坊が生まれた。きつと雪だるまの生まれ変わりなのだろうと皆が噂し、名に「雪」の字を入れることが流行した。

影も形も消ゆれば元の水となるやら雪だるま

星の数ほど

小春まりか

今日もまた可愛い女の子を連れだした幼なじみの彼。私は街で彼を見かけると、気付かれる前に急いで隠れるようになった。柱の陰からこっそり覗いてみると、先月とも先々月とも違う女の子のようだ。これだけ気の多い彼なのに、彼以外の人を好きになれないのはどうしてなのだろう。

星の数ほど男はあれど 月と見るのは主ばかり

泣いた拍子に

トマトっぽい

手を振る君だった。私の足は、何かに捕らわれたように動かなくて、君はどんどん遠くなる。大切な人だ。失いたくない。動け、動け、体。伸ばした手につられるように、左足が動いて、…ぽすんと落ちた。零れた涙に、ああ、と思う。私はベッドに横になっていて、伸ばした手は虚しく天井に伸びている。失いたくない人なんて、私にはいないのに。落ちきった涙と一緒に、記憶からこぼれるのは、手を振る君だった。

泣いた拍子に覚めたが悔しい夢と知ったら泣かぬのに

主によう似た

豆崎豆太

こどもがほしいと言ってみたらどんな顔をするだろうかと考えることがある。詮ないとわかっていながら幾度と無く繰り返す想像。

今はすぐ目の前にあるこの寝顔がほんの少し遠ざかって、間に小さな我が子が眠っている。今は自分一人に向けられている縮りのない笑顔が、子供にも向けられるようになる。

彼と二人、子の取り合いになるだろうか。それとも子に彼を取られて嫉妬する自分がいたりするのだろうか。休日には子を間に挟んで、三人で手を繋いででかけたりするのだろうか。

ありえないとわかっていながら、その甘い想像を抜け出すことができない。もうすぐ、目覚ましが鳴る。

(無理だよなあ、そんな内臓無いし、俺)

主によう似たやや子を産んで川という字に寝てみたい

あの方恋しや

和南羽里

僕から彼女を誘った。あらゆる面で彼女より秀でているであろう恋人がありながら。携帯が鳴る。彼女は目を覚まさない。

電話は恋人からだった。出ると、波が浜辺に寄せるみたいに穏やかな声が耳に広がる。

「もしもし、わたし」

隣の彼女が目を開ける。ぼんやりとこちらを見つめ、また目を閉じた。僕は彼女の頬に触れた。指先で柔らかく撫でる。嫌がる様子を見せなかったので唇に触れてみた。彼女は指を噛んだ。

僕がこうしていることを恋人は知らない。僕も恋人がどのような状況で話しているのか見当もつかない。可能性はいつもあり過ぎる。

月明かりのような微笑みが頭に浮かぶ。会いたい、と突然恋しくなる。指に当たる歯の硬さが愛しい。

あの方恋しやあの方愛し 恋と愛とは違うもの

立てば芍薬

日魚ときお

美しい人を最初に花に例えたのは誰だろう。着物の柄にも見られる絢爛豪華な花々は、派手だけれど確かに儂さと色気も持ち合わせている。すれ違えば名を知らなくても振り返るだろう。僕だってそうだ。だけど手は伸ばせない。：伸ばせるもんか。成績優秀、スポーツ万能、生徒会長、天が二物を与えた結果。斜め向ここの席に座った、君は眩しい高嶺の花。

立てば芍薬 座れば牡丹 歩く姿は百合の花

さんさ時雨か

ヒロマル

男には二種類の男がいる。

何かの弾みで頭がピンクの妄想で一杯になる男と、そうでない男だ。

祝言の席で背筋を伸ばしながら、隣の妻——元職場の後輩を見る。彼女は角隠しに白塗りの白撫子で僕に視線を返し紅を引いた唇で恥ずかしそうに微笑んだ。

三ヶ月前の飲み会の席。珍しく酔っ払った彼女が僕に短詩を詠んだ。

「さんさ時雨か 萱野の雨か」

何？ それ

最近先輩を見てるとこの唄が浮かぶんですう

へえ

気になって帰ってから調べたら続きはこうだった。

「音もせで来て濡れかかる」

宴も佳境。彼女の叔父さんの、この地方の祝言で定番の祝いの唄。

さんさ時雨かゝ月

……ああ。そういう事か。

さんさ時雨か萱野の雨か
音もせで来て濡れかかる

忍び足して

和純

秋の夜長。他の者を起こさぬよう、俺は静かに戸を開けて寝間を出た。着物の衣擦れと足音を殺めて廊下を進み、ある部屋の前で立ち止まる。相手は気配で気付いてくれたらしく、すぐに障子が開かれた。

“カナ、カナ”。

十月だというのに、時外れの蝸が鳴いている。こんなにも可憐な声で鳴く蝸を、俺は知らなかった。声が小さく、語尾しか聞き取れなかった俺が首を傾げ再言を請うと、

「…こんな時間にどうしたのかな？ 急用、かな？」

寝間着姿の彼女は同じ言葉を奏でてくれた。…頬を紅葉の色に染めて。

「わかっておられるでしょう？」

そうして俺達はいつも通り唇を重ね、褥に纏れ込み、帯を解く。初めて狂恋を知った男の宵が、短い筈も無く――…。

忍び足して閨の戸開けて そつと立ち聞く虫の声

惚れさせ上手な

中森つん

かたん、と流し台の赤いコップに歯ブラシを入れる。

部屋の主は布団の中ですやすやと寝息を立てているのに、鏡に映る私は寝不足な目つきをしていた。私の作ったカレーを絶賛して食べながら笑っていたあの顔が、最後の思い出になるかもしれない。本来なら直接返すべきものを、どこに置けば気が付いてもらえるか考えて、流し台へと目が行く。そうだね、ここがよさそうだ。

からん、と流し台の青いコップに合鍵を入れる。

他の女性と話をしても、怒ったりしなくて済むようになりたい。もっとあなたに優しい人でありたい。穏やかに毎日を過ごしたい。ただそれだけの理由だった。

おはよう、大好きな人。さよなら、大嫌いな人。

惚れさせ上手なあなたにくせに 諦めさせるの下手な方

あきらめましたよ

中森つん

「ふざけんな馬鹿野郎っ」

留守番電話には彼の怒鳴り声が録音されていた。怒られる筋合いはある。頬を濡らした涙の温度を忘れられず、この先ずっと、一人で生きていくかと自嘲した傷口に、声が染みる。わかってるよ私が馬鹿なもの、同じくらいあなたが馬鹿なもの。

「ふざけるなよ、ばかやろう」

一音一音、丁寧に唇を震わせる。新幹線で先回りして、改札の前で待ち伏せをした、あなたのほうこそ。強引に抱き寄せられ、頭の上からまた「ばかやろう」とこぼされる。ああもうほんとに、疲れた。

あきらめる方法がわからないから仕方がない。あきらめられないことにしよう。

ごめんね、大好きな人。ありがとう、大嫌いな人。

あきらめましたよどう諦めた あきらめられぬとあきらめた

散切り頭を

豆崎豆太

「散切り、頭を、叩いて、見れば、文明、開花の、音がする」

教科書に乗っていた古い歌を読み上げながら、友人が俺の頭を叩く。

「人の頭をリズムカルに叩くな」

「お前の頭もとつとと文明開化しろポンコツ」

「うるせえほっとけバカ」

「バカはお前だ！毎回毎回何個赤点取るつもりだ！終いにや留年するぞバカ！」

誰のせいだと思つてんだ、と俺は口にはしない。毎回毎回テスト勉強と言って俺の部屋に上がり込む友人の、その無防備のせいで、俺はほとんど何も頭になんか入りやしないのだ。

散切り頭を叩いてみれば文明開化の音がする

不二の雪さえ

小早川

「問三と問十二が解けない」

「なんでだよ。何度も教えただろうが」

「知らねえよ」

お前の教え方が悪いんじゃないの、とふてくされて椅子の脚を蹴る。もうすぐ夏期講習が終わって全国模試が来る。同じ学校に行きたいなんてもう言えなくなってしまう。言えば苦しめる。おれも苦しくなる。

「富士山でさ、雪積もってるイメージじゃん」

「あ？ なんだよ急に」

「でも最近夏は減ってるんだよ。溶けてんの」

言って、いぶかしげなその顔を指差して、笑って。

「富士山の雪だつて溶けるのに、こんつな問題も解けないなんてなああああ?!」

「うぜええええ!! 駄洒落やめろ!!」

茶化す他におれにできることなんて、もうない。

不二の雪さえとけるといふに心ひとつがとけぬとは

三千世界の

ルオ

障子の先が白み始めた。どこか遠くで、鳥が鳴く。髪を整えようと起き上がった矢先、伸ばされた腕に再び囲い込まれた。

「もう、少し」

掠れた低い声。頭を預ける形になった胸元の感触に傷の跡を認めて目を伏せる。昼は纏う衣服に、夜は溢れる熱に隠される数多のもの。嗚呼、とすぐ近くで息が洩れる。

「……あんなしろしか烏なんち殺して、このまま、こうしときたいっちゃ」

ぼやく声には故郷の訛りが混ざっていて、小さく笑う。

「朝が来なければ当代一の色男を送り出す楽しみが無くなって仕舞うじゃありませんか」

満足げに喉が鳴る音がする。時に雷電のごとく語られる人が、言葉ひとつで微睡に戻ることが、可笑しくて嬉しくて仕方無かった。

三千世界の烏を殺しぬしと朝寝がしてみたい

浮気うぐいす

ルオ

見目がいい人間と想いを交わすと苦勞する。分かりきっていたことに、何度目か分からないため息を吐いた。

テラスでの食事を終えた後、目的地への道を聞くと向かいの席が空いてからどれくらい経ったのか。少なくとも珈琲はとつくに冷めている。

きやあきやあと聞こえる騒ぎから察するに、向かった先は女学生の集団だ。年下は対象外とか仰ってませんでしたっけ、と胸中で呟いて茶器を置く。

視線を寄越してやれば、悪戯っぽく口の端を上げる伊達男がいる。黙殺しようとして、気が変わった。立ち上がる。腕を掴んで嫉妬たっぷりに拗ねてやれば、あの切れ長の瞳はどんな色を宿すだろう。生憎と、焦らされてばかりの花の役目は、もう飽きたのだ。

浮気うぐいす梅をばじらしわぎと隣の桃に鳴く

よその夢見る

猫屋久太

寝言呟くその名が誰か知らぬが苛立つ昼下がりに。

卒業して数年。休日の午後。

俺が膝枕をしてやってる相手は妻子持ちのおっさんである。

かつて自分の教え子だったやつに膝枕をされて、呑気に昼寝。しかも誰の夢見てんだよ。嫁の名前ならまだしも、誰だよそいつ。息子居たっけ？わかんないな。この人俺の前で家族の話しないもんな。

自分が一番になれない事は解ってる。

それでも、休日をこうやって一緒に過ごしてくれるから。

この穏やかな寝顔は自分にしか見せてないと思つて、

おっさんの頬をひっ摘む。

「自宅で寝る時ぐらいは俺を夢に見ろよ。そしたらこの寝言はチャラにしてやる。」
そんな呪いを呟いてひっ掴んでた頬を優しく、愛おしく撫でる。

よその夢見る浮気な主に貸してくやしい膝まくら

惚れて惚れられ

琢

「お腹空いてる？」

真夜中帰宅した俺をいつも笑顔で迎えるお前。どうせまた玄関で座って待っていたのだろう。掴んだその手が冷たい。馬鹿な女だ。

「温かいものにするね。」

動き出す細い腰を引き寄せた。温かいものならもうここにある。一々恥じらう姿が愛しくて、また際限なく抱いてしまいそうだ。お前の熱い吐息と柔らかな肌、毎晩食っても飽きやしねえよ。

惚れて惚れられなお惚れ増してこれより惚れよがあるものか

惚れて通えば

ねん

都会の片隅で夜行バスに乗り込んでから数時間。行きはあんなに速かったバスは、夜の闇をていねいに縫うように走っている。

遠くに住んでいる上に多忙な恋人とは、最近ゆっくり話もしていない。約束を何度も破られて、「仕方ないね」がすっかり口癖になって、でも声に出すたび鋭く胸に走る痛みにも、もうひとり耐える自信がなかった。このままバスごと夜に吸い込まれてしまえばいいのに。暗闇の中どこまでも走り続けるバス。どこにも行かなくていいのなら、それもいいかもしれない。

揺れるバスの窓とカーテンの隙間から空が明るくなってゆくのが見えた。冷めた缶コーヒーを一口すすって目を閉じる。恋人の顔がうまく思い出せなかった。

惚れて通えば千里も一里逢わで帰ればまた千里

信州信濃の

すいすい

オレンジ色の目立つ幟が、今日も私の行く手を邪魔していた。風にはためく幟を一瞥して通り過ぎ、数メートル先の暖簾をくぐる。らっしやいませー！

「お、今日は来たんだ。昨日はどうした？」
威勢の良い声が出迎えてくれるこの店で、私は常連を越えて家族のようになっていた。

「あの上司よー。コンビニで済ました。いつものやつ！」
「はいよ！」

ねじり鉢巻きのお兄さんが、手品のように包丁を打ち付けていく。さっと湯に通せば、あつという間に出てきた輝くどんぶり。

「うはーっ！待ってました！二日振りねうどんちゃん！」
うどん職人のお兄さんは、いつも私を見て笑うのだった。
帰り際、オレンジ色の新蕎麦の幟は、もう視界にすら入らない。

信州信濃の新蕎麦よりもわたしやあなたのそばがいい

思い出すよじや

せいや

戦場でそれを見たとき、一目で憎悪に囚われた。自らの懸想で主を振り回す傲慢さが妬ましい。主が在り続けることを疑いもしない考えの足りなさが恨めしい。この男は、告げなかった言葉が過去を呪う後悔に変質する苦痛も誓いの行き先すら喪われる恐怖も知らない。自己満足の忠誠が主を孤独に向かわせることすら気がつかない視野の狭さが憎かった。

だからそれは衝動だった。臥所に忍び込み、考えの足りない頭に暗器を振り上げた。本当にそうしたいのはこの男ではないと判っていたが、これ以上突きつけられるのに耐えられなかったのだ。

思い出すよじや惚れよが薄い 思い出すよじや忘れずに

表向きでは

ボンゴレーノ麴

つほみぼっかりの桜並木を抜けて、あたしたちは今日、女子高生というブランドを捨てる。そこかしこで聞こえる笑い声と泣き声をかき分け、あたしは担任の先生に精一杯の優等生顔で近付いた。模範的な挨拶と、花丸満点のプレゼント。女子高生にしては頑張った贅沢なハンカチ。先生の冷静なありがとうを遮って、あたしは先生にしか聞こえない声で言った。

「先生。もう二年間、あたしをあげる。だから先生もあたしにちょうだい」
あたしが法律的な大人になるまでに、先生の薬指には指輪が光るかもしれない。でも、あたしはハンカチの包装紙に書いたアドレスを、これから二年間は変える気が無いの。本当よ、信じてないでしょ、せんせい。

表向きでは切れたと言えど蔭でつながる蓮の糸

逢うたその日の

小春まりか

「……うん。……うん」

「……聞ってる？」

「んー……。でもそろそろ眠いから寝るわ」

「そっか。……おやすみ」

いつもは会えない人だから、毎日の電話が日課。でもここのところ彼がそっけないように感じる。前のデートの時にはとても愛おしそうに私を見つめてくれていたのに、まるで別人のようだ。傍にいる時しか愛を感じられない遠距離恋愛って、意味あるのかな。

会えた日の彼との記憶で今日を補完して、悩みながらも次に会える日を待つ。

逢うたその日の心になって 逢わぬその日も暮らしたい

人もほめるし

萩原とてふ

「あの人の旦那さん、ハンサムよねえ」

「そうそう。昔どこかのコンテストで優勝したそうよ」

こんな話を聞きたび、ニヤニヤする顔を抑えるのに必死になっちゃう。

あのおばちゃんはわかっているおばちゃんなのだ。私の王子様の魅力を惜しげもなく布教するおばちゃんには、私特製の漬物をプレゼント。

「あらあら、ありがとうねえ」

いえいえ。あなた達は私の同志ですから！私の王子様は渡さないけどね！

あれ？彼が王子様なら、私は何なんだろう？姫？家臣？下僕でもいいなあ。

うん。今日も彼はカッコいい。

王子様の寝顔を楽しみながら日記帳を開く。

「人もほめるし私もよいと思ってみとれる主の顔」

あしたもいい日になりますよーにっ！

人もほめるし私もよいと思ってみとれる主の顔

戀という字を

小早川

コード一一〇四（ひとひとまるよん）、一一〇四、繰り返す。

「なんのコード？ 4桁……16進……じゃなさそうだし」

「気になりますか。分析してみます？」

「よし、任せろ」

パズルに挑戦する子供みたいな無邪気な横顔。でも絶対解けないと思う。あなたには絶対。

戀という字を分析すれば いとしいとしと言う心

から傘の骨の数ほど

ひらたてる

このシャワーの水が雨だったなら、なかなかの豪雨だろう。

甘い香りのポディースープを流しながら、そんなことを考える。

こんな雨じゃ傘をさしても大して役に立たないだろうし、いつそ今みたいに濡れて歩くほうが楽かもしれない。

でも、きつとあなたは「だめだめ、ほら、冷えちゃうよ！」なんて言って傘をさしかけてくれるだろう。たとえ自分が濡れたとしても。

それを確信してしまう自分がなんとも情けなくて、とても幸せで。

シャワーの雨を止ませて、あなたの待つベッドへと向かう。

から傘の骨の数ほど男はあれど広げてさせるは主ひとり

寝ぼけ烏に

神保茂

秋づく夜半に、寝ぼけ烏がカカアと鳴いた。僕は夢から引き戻されて、隣にそつと手を伸ばす。月の光を吸った硬いシーツの冷たさが指先にしみる。

布団の左側に寄って寝てしまう癖がついたのは、いつの頃からだったろう。隣に誰かがいたような気もするが、そんなことはなかったようにも思う。いずれにしても、今夜僕が一人で寝ているという事実には変わりはない。

寝ぼけるのも無理はない。虫の音ひとつしない、静かな夜だ。

寝ぼけ烏について起こされて見ればわが身と月ばかり

ながい話を

東風

約めるな。身も蓋もない。相手といえは飄々とした声で冗句だよ、と笑っている。

「センスないです。宮仕えは無理ですね」

「手厳しいな」

その後は気を切り替えて耳通りのいい声で的確に解説がされていく。本当は博識多才な良い先生なのだ。時折質問を挟みながら授業は進み、あっという間に刻限になった。

「こんなところかな。君は聡明で感性も豊かないい生徒だねえ」

「光の君の覚えもいいと思いますか？」

「んん？ つふふ、うん。こんなにいい子なんだ、きつと光の君も気に入るよ」

言ってくれる。昔男女は御簾越しにしか会話出来なかったらしいが、現代では画面越しになった。私達女同士なのにね、先生。光にも紫にもなれないなんて。

ながい話をつづめていへば光源氏が生きて死ぬ

どうせ互いの

悠佳里

雨の午後。なぜか幼馴染の愛梨と二人きりになっている。

「なあ」

「ん？」

「お前なんで俺ん家いんの？」

「彼氏に振られたから」

「余計におかしいだろ女友だちんところ行けよ」

「色々聞かれるからヤダ」

「ヤダってお前……」

「ねえ」

「何だよ」

「いつもみたいに話聞いて？」

頭をかいてため息ひとつ。仕方なくいつも通りの返事をする。

「つたくしよーがねーな。今度はどうしたんだ？」
雨はまだまだやみそうにない。

どうせ互いの身は錆び刀切るに切られぬくされ縁

聞いて恐ろし

中村成志

絵に恋をした。開拓期の米国。駅に佇む貴婦人。白い長袖ドレス、白い鍔広帽、白い日傘。列車の中の少女に、もの言いたげな顔で手を差し伸べている（少し開いた唇）。縦1m、横3mの絵に住む女の横顔に、釘付けになった。展覧会に三度通った。行くとたびに小一時間も絵の前で突っ立っていた。面影が臉に焼き付いた。目を閉じても消えなかった。当然、夢に見た。こっそりオナニーもした。画像を検索した。画集を買った。複製画を売る店に足を運んだ。でも、絵の中には野暮ったいお婆さんがいるだけだった。5年後。再び展覧会が開かれた。彼女は、記憶のままにそこにいた。小一時間そこに突っ立ち、無言のまま家に帰った。オナニー？したさ盛大に。

聞いて恐ろし見ていやらしい添うてうれしい奇兵隊

花は散り際

和純

武士ならば敵に背中を向けるなど、あの人が教えてくれたんだ。

鉛玉の雨に撃たれ倒れ伏していた俺は、死力を尽くし立ち上がった。宮古湾に轟く銃声の大輪唱。船上から早暁の空へと噴き上がる仲間達の血飛沫は、まるで鮮やかな花みてえだ。

「……！！……！！」

遠ざかるもう一隻の甲板で、何度も。戦友が俺の名を叫んでいる。

…あとは頼むぜ。

さあ、征こう。時代錯誤の刀（いのちづな）、血濡れの両手に携えて。せめて咲かせてやろうじゃねえか。派手に舞い散れ俺の花。そこで今際に笑ってみせりや、ちったあ鱗背な最期じゃねえか。船縁から放り出されたって構わねえ。身なんざ水面（みなも）にくれてやる。心に御旗を掲げ——いざ。

貫け、誠。

花は散り際 男は度胸 命一つは捨てどころ

泣いた拍子に

下弦

寝ながら泣いている彼女を揺り起こした。

「ゴメン」

手の甲で目を拭って、荒い呼吸を整えようとしている。

「またか。いやんなるな……」

壁のカレンダーのちらつと見上げて、もう一つこぼれた涙を指で払った。

「もう、張り倒してやりたい」

「誰を？」

「夢の中の私を」

ふーん。期待していた答えとは違うな。

「だって、あんな……あんなのに……」

それなら、どギツイコーヒーでも淹れようか。せめてもの敵討ちに。

泣いた拍子に覺めたが悔しい夢と知ったら泣かぬのに

入れておくれよ

小早川

たまにしかゆっくり会えないから。

「早く入れて」

「ん？」

その反動で焦れて口に出せば、そんなに嬉しそうな顔で。

「どこに何を入れて欲しいか言ってる？」

「……口座に五億円入れてほしい」

「貴様」

ほんとに入れてやんねーぞ、と言いながら、そうはできないだろうあなたの首に腕をまわした。未来を約束できないならそのくらいしてくれてもいいんじゃないかって言ってるだけなんだけどな。ばーか。

入れておくれよかゆくてならぬ私ひとりが蚊帳の外

こうしてこうすりゃ

中村成志

「『月が綺麗ですね』って訳したのは漱石だよね？」

「あー、それ都市伝説らしいぜ。なんかの本で検証してた」

「そうなんだ。でもロマンチックだよね昔の人。目、血走らせて『好きだ』とか言われても引くし」

「そうかあ？通じねえだろ今の時代。特にお前、にぶいし」
「分かるよお。だいたい君に言われたくないし」

ピーッ ピーッ ピーッ

「どうだ？」

「第二隔壁まで損傷。突入角度修正不可。あと1分20秒」

「……」

「——」

「まあ、なんだ」

「ん？」

「地球が、綺麗ですね」

「ええ。とても」

こうしてこうすりやこうなるものと知りつつこうしてこうなった

あとがき

「都々逸エレキ冊子」は「都々逸を載せた電子書籍を作ろう！」と言い始めた時にできた呼び名です。一冊目のその電子書籍から数えて、今回でなんと六冊目。ゆく川の流れは絶えずしてと申しますが、時の流れは早く、そして変わりゆくものですね。都々逸だけではなく短編にまで手を出してみました。執筆者の皆さんは難しい難しいと言いながらたくさん書いて下さいました。

初めて寄稿して下さった方もいらっしやいます。小さなものを寄せて集まって出ている電子書籍ですから、初めましての方にご参加いただけることを本当に嬉しく思います。編集部が概ね社畜であることから、今回原稿をお寄せいただいてからお待たせしてしまいました。いつもの皆さんも含め、執筆者の皆様にこの場を借りてお詫びとお礼を申し上げます。

発行ペースも決めずただただ思いつきで作っている電子書籍ですので、次回となる七冊目に何をやるか、そもそもやれるのかは白紙です。ですがきっと何か作ると思い

ますので、機会が合えばまた遊んでいただければ幸いです。

都々逸は良いものです。これからも手を変え品を変え普及して参りますし、それが広がって行くことを願っております。

二〇一六年十一月十一日 小早川



執筆者一覧（順不同敬称略・括弧内ツイッターID）



中村成志 (@nakam8)

都々逸完全初心者祭事大好軽薄浮遊引込思案請教授謝々



和純 (@kasumivoice)

春ばると夏かし都々逸時越え継いで秋ずに冬稿する僕等



トマトっぽい (@vol_008)

流行り廃りもあるにはあるが枯れぬ思いがつまってる



猫亭屑屋 (@gatta_auto)

真面目です。若干の脚色ありますが実話だったりして



豆崎豆太 (@qwerty_misp)

こんにちはホモ屋さんです

NO
PHOTO

和南羽里 (@harin)

特筆すべき点の見当たらない短歌詠み（たまに小説）



日魚ときお (@tokyosanfish) 都々逸クラスタ繁忙期補充アルバイトです。イー。



ヒロマル (@hiromaru712) 僕は前者です。



中森つん (@N2_tsun) 都々逸だと色恋が丁寧に詠める気がして楽しいです。

ありがとうございました。



ルオ (@ruo129) 最近比喻の変態とか言われ始めた、文字書き白臍です。



猫屋久太 (@nekoaya222) あーしくり！あーしくり！！



琢 (@taku_h) 粹でいなせな皆さんと巡り逢えたご縁に感謝です！



ねん (@endofthe_) 惚れて千里を一夜で駆けて往復二万の愛を言う



すいすい (@tnsu1_su1) 信州信濃の新蕎麦よりもわたしやうどんの一択よ



せいや (@petitchante) 出口をなくした感情は狂気だ。



ボンゴレーノ麴 (@peperoncino_k) SSの登場人物の性別はお任せいたします。



小春まりか (@marikatanka) 都々逸企画初参加です。普段は短歌を詠んでいます。



萩原とてふ (@dofellen85) とてふとてふとてふ。とてふ。どうもとてふです。



ひらたてる (@BB_teru) 都々逸より文字数の多い文は難しかったです



神保茂 (@JimbouShigeru) いつかまたどこかで。



東風 (@kochi_192) 初めてのSSなので初めての百合薔薇を散らしました。



悠佳里 (@yukari_rito) もっと広がれ都々逸の輪!!



下弦 (@kagen_s) SSは初?難しかった!



小早川 (@dodoitsu_)

皆さんとってもよかったです♡

以上 二十四名

都々逸エレキ冊子

唄う阿呆に詠む阿呆 唄が化けたる物語

二〇一六年十一月十一日 発行

挿絵 下弦

装丁 猫屋久太

編集 小早川

本書の内容についてのご意見・お問い合わせは
編集者のツイッター([@dodoitsu](https://twitter.com/dodoitsu))にお願いします。

唄う阿呆が紡いだ文字は



唄が化けたる物語